

(様式1)

令和6・7・8年度「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」
学校改善プラン(1年次)【中学校】

【学校名等】

学校名	井手町立泉ヶ丘中学校							校長名	石浦 喜人
学 年	1 年	2 年	3 年	特別支援				生徒数	1 3 8 名
学級数	2	2	2	2					
事業担当教員名	山口 博史								
① 中学校区で目指す子ども像		「地域とつながる力」、「変化する社会を生きぬく力」、「人権を大切にする行動力」、「たくましく豊かな人間力」これらの力を使い、未来のまちづくりを担っていく子ども							
② 目指す子ども像		進んで学び、深く考える生徒（創造） 目標をもち、挑戦し続ける生徒（挑戦）							
③ 目指す子ども像に対する現状と課題		・具体的な目標を持たせることで、学習や様々な活動に意欲的に取り組むことができるが、その一方で、与えられた課題にしか取り組むことができない生徒が多い。 ・難しい課題や分からない課題に対して、粘り強く取り組んだり、方法を模索したりすることが苦手である。 ・家庭学習に取り組むことが苦手である。							
④ 目指す子ども像に達するための仮説		・全教員で、目指す子ども像を共有し、「非認知能力」を働かせる授業づくりに視点をおいた授業改善を進めていき、「認知能力」と「非認知能力」をともにバランスよく育むことで目指す子ども像に近づくのではないかな。 ・教員と生徒で、目指す子ども像を共有し、生徒自身が短期的長期的な見通しを持つことで、目指す子ども像に近づくのではないかな。 ・様々な取組において、主体的に取り組む場面を意図的に設定し、生徒自身が成否を含めた経験を繰り返すことで、目指す子ども像に近づくのではないかな。							

令和6年5月1日現在

【 1 研究主題】

非認知能力を働かせる授業づくり

【 2 研究組織体制】

(1) 中学校ブロックの組織体制

ジョイント・アップ推進委員会（各校管理職・教務・研究主任）

学びのパスポートの分析等を生かした授業改善

個別支援部会

個別支援プログラムによる
学習習慣と生活サイクルの確立

学習集団部会

児童生徒の主体的な取組による
非認知能力の育成

保小中連携部会

学びスタート調査を活用した
学びの土台となる力の検証

(2) 校内の組織体制

学びのパスポート活用推進委員会（管理職・教務・研究主任）

学びのパスポートの分析等を生かした授業改善

主な部会

学習指導部

非認知能力を働かせる授業づくり

特別活動部

生徒の主体的な取組による
非認知能力の育成

総合的な学習の時間部

非認知能力を働かせる探究的な取組

【 3 研究計画・具体的な取組内容】

実 施 月	研究内容、研究方法、成果の公開 等
4 月	
5 月	ジョイント・アップ授業研究会
6 月	
7 月	ジョイント・アップ夏季研修会
8 月	8月上旬*学びのパスポート結果返却、第1回分析・活用研修会
9 月	授業アンケート（学習指導部・非認知能力についても含む）
10月	10月上旬*第2回分析・活用研修会
11月	ジョイント・アップ授業研究会
12月	
1 月	*研究校交流会（予定） ジョイント・アップ授業研究会
2 月	
3 月	授業アンケート（学習指導部・非認知能力についても含む）

【 4 仮説及び成果を検証するための質問項目】

学年	質問番号	質問項目	概念	備考
全	3 1	わからない問題にであったとき、調べたり、さらに深く考えたりしている。	自己調整	
全	4 5	自分の考えたことよりも、相手の方がよい考えを持っていると感じたときは、相手の考えを取り入れるほうだ。	思考の柔軟性	
全	4 8	難しいことでもあきらめなければ乗り越えることができる。	目標に向けて取り組む姿勢	
全	7 2	学習するときには、教科書以外にも、辞書・図鑑・参考書・プリントなどいろいろなものを参考にしている。	精緻化	

* 5・6の分析の項目は削除しています。

【7 分析結果を踏まえた指導改善、個に応じた具体的な手立て】

個に応じた具体的な指導・支援方法

- A：取組のプロセスを褒めることで、自信を持たせ自己肯定感の向上につなげる。
- B：失敗を受け止め、次にどう改善するかの手立てを考えられるようにすることで、自分の評価と方法のすり合わせができるようにさせる。
- C：授業中に個別に声かけをすることで集中力を維持させる。
- D：定期テストの取り組み方法などを振り返り、計画性を持たせるとともに、結果が出ていることに関しては自信を持たせる。
- E：個別や全体の前で褒める機会を増やすことで自信を持たせる。
- F：個別の声かけを継続し、自分に合った学習方法を身に付けさせる。

集団としての具体的な指導・支援方法

- ・失敗させないように先回りをしすぎない。教師は見守る意識を持ち、自分たちの手で取り組みを成功させるような経験を積ませる。その後に個別と全体でフィードバックを行い、より高い目標や支援につなげていく。
- ・心理的安全性の確保を継続しながら、少し上のレベルにチャレンジできるような授業の雰囲気を目指す。失敗を恐れず自分たちの手で何事もやらせてみることで積極性や自分らしさの発揮につなげていく。
- ・自己分析の時間を確保し、努力が結果へつながる経験をさせることで、目標までの計画を立てられるようにする。

【8 仮説の修正】

なし

【9 具体的な取組内容の修正】

なし

【10 生徒の変容（普段の様子から）】

※【7 分析結果を踏まえた指導改善、個に応じた具体的な手立て】で計画した指導・支援を行った結果、生徒にどのような変容が見られたかを記載してください。

- A（失敗を受け止め、次にどう改善するかの手立てを考えられるようにすることで、自分の評価と方法のすり合わせができるようにさせる。）
- ・1週間の学習内容の定着を確認するテスト（5教科）で、具体的な目標設定（点数）をさせ、毎週自分の取り組み方と結果について振り返らせた。
 - 徐々に教科ごとの勉強時間配分やテスト勉強のやり方を考えられるようになった。
- B（授業中に個別に声かけをすることで集中力を維持させる。）
- ・家庭との連携をより密にし、学校と家庭の両面から本人が「包み込まれている」と感じられるような支援を続けた。
 - 家庭と良好な関係を築くことができ、本人への声かけにも素直に応じられる場面が増えた。
- C（個別や全体の前で褒める機会を増やすことで自信を持たせる。）
- ・能力の高さを評価し、リーダーや責任ある役割を与えた。
 - 自分の能力を認められることで、周りの仲間とも良好な関係を築けるようになり、学校生活の様々な場面で前向きな言動がみられるようになった。

【11 2年次の研究構想】

京都府学力・学習状況調査の結果を元に、職員全体で以下について交流する場を設ける

校内研修①

ステップ1

○町全体で共通して選択した質問項目について、散布図などを参考に、学力との相関関係を分析する。

○各学年で特徴的な生徒、気になる生徒を数名ピックアップする。

○教科の調査において下位10%に入っている生徒の質問調査の回答や学習方法、非認知能力の数値の分析を行う。

ステップ2

○ピックアップした生徒たちを今後、どのように指導・支援をしていくか「具体的な手立て」を検討する。

校内研修②

ステップ3

○「具体的な手立て」を行った結果、ピックアップした生徒の中で特に変容が見られた生徒について校内で交流（発表）する。

ステップ4

○非認知能力の育成を目的として、効果の見られた指導例を学校全体で交流する。